

D・H・ローレンスの 詩の系譜

増谷外世嗣

「私は産業時代に詩人と生れた運命に心底から抗議する。なぜなら産業時代に詩人であることは全く不可能だからである。産業時代が自らを確立して以來、英語國民の間には、眞の大詩人にふさわしい詩人はたった二人しか現われていない。ホイットマンとローレンスがそれである。彼等が偉大なのはその抗議においてであり、またその稀なる積極的な歡喜の表現においてである。」

これは、H・リードが「Poetry and Anarchism」(一九三八年)の中で言っている言葉である。この中で言っている「産業時代に詩人であることは不可能である」ということは、産業時代は詩の對象にならないというようなことでもなく、又、産業社會から逃避した小さな感傷的孤獨の場に於いてのみ詩が可能であるというようなことを暗示しているものでもない。「産業主義は永續するに相違なく、」しかも詩人は如何なる意味においても人間としてその中に生きて行かねばならない。しかし又、産業社會に生存するということは多かれ少かれあらゆる個人に、'mass opinions' と 'mass standards' への服従を要

求してくるものでもある。逆に又、現實の社會が詩人に保證するものは孤獨だけである。こゝに詩が、集團的一様化に反抗する自我表現であるとするならば(そして多かれ少かれ詩とはそういう特殊な場を必要とするものであると思われているのだが)、詩は必然的に感傷的孤獨の表現となり、産業時代に生存する苦惱、冷酷、絶望の表現へと追いこまれて行く。否、詩はそれへの批判であり反抗である、といわれてもそれは現代文明に捕われの身となった自意識のヒステリーであつたり、すねた形にすぎない場合が多い。それらの自意識は更に限りなく意識を派生し、複雑な複合意識と不自由な言葉が自我の狭い局所でもつれからみ合つて、詩の可能性の場は孤立した自我の益々狭い局所へと追いこまれて行く。ローレンスはこの状態を彼獨得の素朴なスタイルで次のように感じ取つた。

「人間の一生は所詮、意識の世界への限りなき探究である。行く手に、晝間は雲の柱が、夜は火の柱が、荒漠たる時の中を進んで行く。人間は一つの嘘を止めるために別の嘘をつかねばならぬ。かくて嘘は驢馬の鼻先にぶら下げた人蔭のように、人間の鼻先にちらついてゆくのだ。……(中略)……」

……意識の世界の中へと無限に探究の歩を進めてゆけば、結局は永遠に危険なる白晝の谷間へと降りてゆくだけである。

……(中略)……

たとえば現代の文明がそうだ。我々はやつと自分達が手に入れたものが氣に入らないというのでむかつ腹を立てている。しかも既に千年もかゝつて建設したものであるので今更作りかえ

ることも出来ないのだ。とどのつまり我々は文明を憎悪する始末となつてゐる。

これじゃあ仕様ががない！ 一體どうしたらよいのだ？

ところがどうだ、どうしようもないのだ！ 今日我々の状態はまるでむずかる子供のようなのだ。子供は自分がやっている遊びが気に入らないと、自分の意志に反して無理にやられてゐるとどうしようもないにむずかるものだ。すっかり拗ねてしまつてゐるのだ。」と。

病患としての意識の無限襲來から脱出せんとするローレンスの態度は、次のような詩に明白に打ち出されてゐる。

Only man can fall from God

Oly man.

No animal, no beast nor creeping thing

no cobra nor hyaena nor scorpion nor hideous wh-
ite ant
can slip entirely through the fingers of the hands of
god

into the abyss of self-knowledge,
knowledge of the self-apart-from-God.

For the knowledge of the self-apart-from-God
is an abyss down which the soul can slip
writting and twisting in all the revolutions
of the unfinished plunge
of self-awareness, now apart from God, falling

fathomless, self-consciousness wriggling

writting deeper and deeper in all the minutiae

of self-knowledge,

downwards, exhaustive,

yet never, never coming to the bottom, for

there is no bottom ;

zigzagging down like the fizzle from a finished rocket

the frizzling falling fire that cannot go out, dropp-

ing wearily,

neither can it reach the depth

for the depth is bottomless,

so it wriggles its way even further down, further

down

at last in sheer horror of not being able to leave off

knowing itself, knowing itself apart from God, fa-

lling.

(Only Man)

この詩は一氣呵成に讀まれるべき詩である。頭をひねつたり、分析を試みたりすることは赦されなから。ローレンス自身は身體中からまじわりつかれる意識のたう渦中には既にゐるのである。彼は既にさういふ世界から脱出してゐるのである。奈落の底に落ちて行く人間共を井戸の上で小躍りしながら眺めてゐる鬼の歌である。言葉は新しく一元的である。

産業時代は意識を貯藏し、感情を、言葉を貯藏してきた。絶

that lies between the old self and the new.

 Oh build your ship of death, your little ark
 and furnish it with food, with little cakes, and wine
 for the dark flight down oblivion.

(The Ship of Death)

長きに失する引用のようであるが、ローレンスの詩はその二、三行を引用することによって批評出来るような詩とは大分違う。彼は数語や、二、三行の表現に意味を持たせるような思わせぶりの詩はかゝらない。これだけでもこの詩全體の五分の一に満たない。しかも、この中で注意すべきは「忘却」とか「死」という言葉を、通常使われているような慣習的な意味に解した。この詩は全然解されなう。この「忘却」と「死」は脱出の歡喜である。この「忘却」とは次のようにも表現されるものなのである。

Are you willing to be sponged out, erased, canceled,
 made nothing?
 Are you willing to be made nothing?
 dipped into oblivion?
 If not, you will never really change.
 The phoenix renews her youth
 only when she is burnt, burnt alive, burnt down
 to hot and flocculent ash.

(Phoenix)

過去から蓄積された一切の意識、觀念、言葉を捨て去ることである。ローレンスの使っている言葉は生れたばかりの言葉なのである。瞬間の再誕の言葉なのである。

'In the beginning was the Word
 And the Word was God
 And the Word was with God.'

(St. John)

「はじめに言葉あり、言葉が神なりき、言葉は神と共にあり」ということを肉體と血で感じとったローレンスにしてみれば、今日の言葉は随分「はじめ」からは遠く離れ、何時の間にか神から捨てられた知慧は「言葉」を「墮落」させて行つたのである。何時の間にか「言葉」は「へその下では」「わいせつ」なものとなつて行つたのである。人間を造り給うた神が「子宮」とか「男根」のところへきて、その創造の手をやめてあとはどうにもでもなれ、と悪魔に委せたなどとは、人を愚弄するにも程がある。「子宮」とか「尻」とか「男根」も神の造り給うたものである。神を離れた人間の知慧がそれを意識したことから、それを「罪」とか「わいせつ」としてしまったのである。こゝ言つた「言葉」は長い間かかつて心によって穢され、不潔な心理的連想に仕立てあげられてきた。そうしてこゝしたことは性に關係したり性をはらむ言葉のみが辿つた運命ではなかつた。政治や道徳や教育の世界で猛威をふるう言葉こそ、人間の最も卑劣な欲望意識の正當化として墮落して行つたのである。

The Word is but the midge that bites at evening.

Man is tormented with words like midges, and they follow him right into the tomb.

(The Man Who Died)

ヨーロッパの土塊のようにかたまつた宗教意識が新鮮な性意識を殺してしまつたことを描こうとする時、現代の道德意識がローレンスの文學を背徳と呼ぶ。土塊のように腐敗した性意識が新鮮な生命の復活を願う肉體を「わいせつ」と呼ぶ。腐敗した言葉、意識が、大きな異常な姿となつて襲いかかり、我々をいわれなき恐怖の底へ突き落しているのである。金の意識、原罪觀念の意識、科學の意識……自我の分裂、言葉の分裂から脱出するには「墓場を越え」ねばならぬ。……beyond the tomb they (words) cannot go. (The Man Who Died) だからである。墓場を越えてよみがえってくるには「死の舟」が必要である。先述の引用詩の中に出てくる「死」の意味している「死」は、勿論自然死でもなく「self-murder」でもない。自我の終局的解放 (his own quietus) を可能ならしめて生に向う出口なのである。古き自我と、新しく生れかわる自然、の間にある長い探究の苦痛の旅に向う船なのである。しかし探究と言つても單なる才知だけの暗い哲學的「自己」否定のそれではなく、軽やかな全人的なそれである。食物と菓子と酒をつんだ箱舟である。この詩はノアの洪水を聯想せしめるかも知れない。その場合には次のようなローレンスの意見は重要な參考になるだろう。

「今日我々はむかつ腹を立てて、洪水がやってきて我々の世

界とその文明を洗い流してしまふ日のくることを待っている。よろしい、さらば洪水をして來たらしめよ。しかし誰かがノアの箱舟を準備しなければならぬ。

我々は、例えば、もし恐ろしい崩壊と恐ろしい流血の慘事がヨーロッパを襲うたなら、その崩壊と流血の中から、生き残りの、生れかわつた人間が、必然的に起ち上つて來るにちがいないなどと勝手に思いこんでいる。

だがそういう考えはまちがっている。あの怖ろしい時代のロシアを逃れてきた人たちを見たつて、どうも生れかわつた人はあまりにやうだ。彼等は嘗つてないほど怯^{おそ}げづいてゐる。大變動によつて勇らしい人間にかわるどころか、この人達はずいづい去勢されてしまつたのだ。

……(中略)……

大變動だけでは人間にとつて何の役にも立とう筈はなかつたのだ。頼みとなるのは唯一つ、人間の魂の中に生き、と輝く探究の火花である。この生き、と輝く探究の火花がなければ、死も變災も明日の新聞よろしく全く無意味なものとなり終るばかりである。

ローマの没落を例にとつてみようか。紀元後第五、六、七世紀の、あの暗黒時代にローマ帝國を襲つた諸々の變動も、ローマ人を變えることはいささかもできなかった。ローマ人たちは常に變らず、むしろ今日の我々のように、可能な限り楽しい時をすごして何の思はずらうこともなかつた。ローマ人たちを一掃したのはむしろ、フン族、ゴート族、ヴァンダル族、西ゴ

ト族その他の諸民族であった。その結果はどうであったか？
バーバリズムの洪水が起ってヨーロッパを隅々まで呑みこんで
しまった。

しかし、幸いなるかな、動物たちと共に箱舟に乗ったノアが
いた。それは若々しいキリスト教であった。波のまにまに漂っ
て探險の航海をつゞける小さな箱舟のように、ひとり堅固に固
められた僧院が諸處にぼつんと立っていた。意識の領域に
おける偉大なる探險にも何らの破綻も生じないものであった。
吼え猛り狂う洪水のさ中にあつても、誰かしら少數の勇敢な人
々が希望の虹を仰ぎながら箱舟を操ってゆくものなのだ。

……(中略)……

しかし言うまでもなく、ノアの運命を擔うものは常に地味な
少數者である。ローマが没落し始めた頃の、初期キリスト教徒
たちもむろんそうであつた。ところが現今ではキリスト教徒は
救いようもない位に流行る多數者である。今度は彼らが没落す
る番だ。

私はキリスト教の偉大さを確に承知している。だがそれはあ
くまで過去の偉大さである。これら初期のキリスト教徒達がい
なかつたら、人間は暗黒時代の混沌と絶望の不幸から浮かび出
ることはなかつたであらう。私も紀元後四百年という年に生れ
ていたならば、おゝ神様、眞實の熱烈なキリスト教徒になつて
いたことでしょう。だが、私は今一九二四年という年に生を享
けている。キリスト教の探究精神も今は終つた。探究というこ
とはキリスト教から全く失われてしまった。我々は神を求めて

新しい探究に乗り出さなければならぬ。」

才知で知ると言うこと、知識をきらつたローレンスに神の思
想を語らせることは非道である。彼の探究は才智や言葉のそれ
ではない。「カントは頭と心で思考したのであつて、決して血
で思考したのではなかつた。ところが血もまた思考する」⁽³⁾の
である。ローレンスの神は血につながり、生に、瞬間に、つな
がる神であつた。言葉は意識や知性の所産ではなかつた。言葉は
血であり生であり、血と生につながる神であつた。神は肉體を
持っていた。

God is the great urge that has not yet found a bo-
dy

but urges towards incarnation with the great crea-
tive urge.

.....

There is no god
apart from poppies and the flying fish,
men singing songs, and women brushing their hair
in the sun.

(The Body of God)

自我の分裂、言葉の分裂を捨てたローレンスの言葉が一元的
な、生れたばかりの、生であり、瞬間であり、歡喜の言葉であ
り、いわば行爲でさえある。それは凡そ現代英詩の複合感覚の
言葉の系譜からは全く離れていることは充分にうなづけること
であらう。

God, I am caught in a snare !

I know not what fine wire is round my throat ;

I only know I let him nose like a stoat

Who sniffs with joy before he drinks the blood.

And down his mouth comes to my mouth ! and do-

wn

His bright dark eyes come over me, like a hood

Upon my mind ! his lips meet mine, and a flood

Of sweet fire sweeps across me, so I drown

Against him, die, and find death good.

(Dog-Tired)

眼も唇も輝かしい生命の焰にじりまされてくる。病的な要素は微塵もない健康な、意識に支えられた自我抹殺の死は恍惚の歡喜である。病患の痕跡が作品の中にかきわなければ同病相憐れめない世界からは遂にローレンスはしめ出されるばかりである。そしてその方がローレンスには本懐であらうし、喜びであったのだ。又、それなるが故にこそ、ローレンスの却初の言葉は二十世紀文明への本質的批判ともなり得るのである。現代的意識の世界で、ひねくり廻される文藝批評の領域ではローレンスの詩をひねくり廻す批評の言葉が見當らないのである。ローレンスの言葉は概念でもなく、暗示でもなく、ローレンスの詩には永遠性の形も美もない。瞬間の接觸を生きる言葉なのである。いわば行為、感覺、歡喜の傳達である。T・S・エリオットを主潮とした二十世紀の英詩の系譜がその二十年代にローレ

ンスの詩に今少し注目していたならば、恐らくその後の現代英詩の主潮的系譜は大幅變つていたことだろう。次の詩にみられる「魚」のその「ことそのことの中に内在するそのもの生命、神との接觸に、もつと虚心になれて来たなら、彼等はそれを知つて、いつたところかとも知れない。次の言葉「一語」語が瞬間的「ごち〜」ととび出す新鮮を見よ。

Fish, oh Fish, 魚、あー魚、

So little matters ! あんな小つさなもの !

.....

As the waters roll 水がころび廻るのと一緒に

Roll you. お前もころがる。

The waters wash, 水が洗う。

You wash in oneness お前も一つになつて洗われ

And never emerge. 決して決して自分だけ現れ出る

なんてしない。

Never know, 知るなんてしない、

Never grasp. 理解するなんてしない。

.....

But oh, fish, that rock in water,

You lie only with the waters;

One touch.

.....

You and the naked element, *

[element は水]

Sway wave.

Curveting bits of tin in the evening light.

Who is it ejects his sperm to the naked hood?

In the wave-mother?

Who swims enwomed?

Who lies with the waters of his silent passion, wo-
mb-element?

.....

Himself all silvery himself

In the element,

No more.

.....

I dint know his God.

(Fish)

この詩は全詩を通讀しないと、これだけの引用では誤解を招きそうでもある。しかし、彼の詩と小説の、通常には形こそ變つてゐるにせよ、その兩者は一貫して、同じ却初の生命と言葉の探究であり、如何に同じ言葉が繰り返されていようと、それが如何に言葉の慣習的意味を殺して新しい生命を興えてゐるか、を論じたいのが私の意圖であつた。が、頁數がつかせてきた。ローレンスの本骨頂に至るには程遠い。最後に同じ歡喜の詩人であつたホイットマンについてローレンスの語る詩論に耳を傾けておこう。

「ホイットマンはなるほど前を見、後を見た。がしかし、彼はあらゆるものに物欲しとあこがれるようなことはしなかつた。彼の叫びの眞骨頂を解するためには、即刻の瞬間を、その叫びの迸り出る源にまで押寄せ入つた生の存在を純粹に認めねばならない。永遠とは、現實の『現在』から抽象された概念である。無限とは、追憶の蓄積、あるいは野心の蓄積にすぎない。つまり人間が作り出した概念にすぎない。うちゆらめき、迅速に過ぎゆく『現在』の時間、これこそ『時』の中樞である。これこそ宇宙を支える神の内在于給う姿である。宇宙の中樞は鼓動であり、肉體をそなえた自我である。それは神祕的ではあるが、觸れることのできるものである。」

そして、「無限なる過去の詩や無限なる未來の詩があるのと同様に、即刻の現在の詩、いわば發生期の詩がある。『現在』が具體化されたところの、沸きたぎる詩こそは、未來や過去の、永遠に朽ちることのない寶玉よりはるかにまさるものである。その瞬時性の中にうちゆらめきながら、それは結晶體を、眞珠のような寶玉を、即ち永遠的なものの詩篇をはるかに凌ぐものである。」

(1) (2) (3) Books.

(4) (5) Preface To The American Edition of New

Poems.

(何れも「愛と生の倫理」(南雲堂)に含まれてゐる。)

(一橋大學講師)